Osaka University Knowledge Archive

Title	元雑劇研究
Author(s)	陳, 文輝
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57863
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【22】

氏　　名	陳（ちん）　文（ぶん）　輝（き）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３４７６　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**元雑劇研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　高橋　文治 （副査） 教　授　浅見　洋二　　教　授　湯浅　邦弘

論文内容の要旨

中国の北方では十三世紀に新しい歌曲が勃興し、中国文学史を代表する文学ジャンルへと発展した。この新しい歌曲は、小唄として楽しまれた「散曲」と、オペラとして楽しまれた「元雑劇」の二つに分類されるが、ともに同じ音楽を用い、様式や作者、歌唱者も共通していたため、流行した時代を取って両種を一般には「元曲」と一括する。陳文輝は、この「元曲」のうち特に演劇に焦点を当て、時に「散曲」にも論及しつつ、「元雑劇研究」を展開する。本論文は、問題の焦点と全体の構成を説明した「序言」、第一部「環境と背景」、第二部「パロディー精神と文学性」、第三部「恋愛雑劇の分類とその主題」、ならびに「結語」からなり、400字詰原稿用紙換算で約450枚である。

第一部「環境と背景」では、「元雑劇」が上演された環境や時代背景が論じられ、主に『竹葉舟』『販茶船』という二作品が扱われる。第一章「『竹葉舟』考」では、『竹葉舟』の現存する最古のテキストが取り上げられ、そこに見られる様式上の不体裁に着目して、その不体裁がどのような経緯によって生まれたか、上演上の問題にも論及しながら現存テキストの生成過程が論じられる。第二章「『蘇卿物語』考」では、妓女の恋愛を扱って元朝期に最も影響力をもった『販茶船』劇が扱われ、同時代に書かれた多くの「散曲」をもとに、今日は失われてしまったその物語の内容を考察し、それがどのような変遷をたどって、どのような観点から書き換えられたかを明らかにする。

第二部「パロディー精神と文学性」では、「元雑劇」を特徴付ける時代精神と文学性が論じられ、主に『救風塵』『揚州夢』『両世因縁』の三作品が扱われる。第一章「『救風塵』と『揚州夢』」では、「元曲」を代表する作家、關漢卿と喬吉とが取り上げられ、従来からある定番のストーリー展開が彼らによってどのように書き換えられたかを明らかにし、彼らの書き換え原理に当時の時代精神を見ようとする。また第二章「玉簫の物語」では、「玉簫の物語」を扱った唐代から明末に及ぶ数々の作品が取り上げられ、元朝期の『両世因縁』劇がその中でどのような位置にあるかを論じ、あわせて「元雑劇」の文学性の一端を考察する。また、第三部「恋愛雑劇の分類とその主題」では、恋愛を扱う「元雑劇」の真の主題が何であったのかを、従来から行われた雑劇全般の分類法とからめて考察し、また付論「文学史における「曲」の位置付け」では、「曲文学」全般と伝統文学の関係が幾つかの断面として扱われる。付論第一篇「杜仁傑の文学論」では、金元交代期を生きた伝統的知識人、杜仁傑がいかにして「元曲」の作者になったかを、彼の文学論と「散曲」等の実作を対照して明らかにし、また第二篇「歌と物語の世界」では、小説と歌曲の関係を「楽府」や「詞」もまじえて概観する。

論文審査の結果の要旨

本論文は「元曲」という一つの文学ジャンルを扱い、議論や観点の多彩さはあるものの、全体が一つの問題意識によって貫かれているとは必ずしも言えず、最終章の付論「文学史における「曲」の位置付け」にいたっては、それまでの議論と無関係な、正しく「付論」の印象を免れない。また、第二部第一章「パロディー精神と文学性」と第三部「恋愛雑劇の分類とその主題」はともに元雑劇中の恋愛劇を扱い、取り上げられる作品も一部重複するが、帰納される結論は若干異なり、両者の間に多少の矛盾が見られないわけではない。論文中に頻用される用語についても、時に厳密な概念規定が行なわれないまま議論が進められ、論理展開に曖昧な点が一部見られないわけではない。その意味で本論文筆者が課題とすべき点は少なくないが、にもかかわらず本論文は、次の諸点において独創性を示し、大きな成果を上げたといえる。

まず第一部第一章「『竹葉舟』考」では、台本としてきわめて不完全な元刊本『竹葉舟』劇に様々な「不体裁」を発見し、その「不体裁」がなぜ生じたか、原因を究明する形でテキストの成立過程が論じられ、本劇の台本がいくつかの部分の「継ぎ接ぎ」であることを説得力をもって明らかにした。本論文は、現存テキストに対する文献学的な詳細な分析と、演劇研究全般がもつべき社会史的なアプローチとを見事に融合したものであり、そこから得られた結論や分析方法は、今後の元曲研究、特に元刊本元雑劇研究に新たな視野を開くものである。

また、本論文の付論第一篇「杜仁傑の文学論」では、金元交代期を生きた杜仁傑という文人がいかにして「元曲」の作者になったか、彼の伝統文学世界における文学理論や実作を分析することによって、文学者の内的なメカニズムと時代の潮流の両面から明らかにした。従来の中国文学研究では伝統文学と俗文学とは別々に論じられ、両者の関係が明らかにされることはなかったが、本論文においては同時代の文化現象として両者が同じ俎上に上され、しかも、いわゆる「俗文学」を単なる「戯作」とせず、伝統文学から派生した別種の文学的営為とする新たな観点を示した。本論文が示したこうした示唆もまた、中国文学研究に新たな視野を開くものといえる。

また本論文の第一部第二章「『蘇卿物語』考」は、今日は失われてしまった『販茶船』劇の内容を考察することによって、「小説」「元雑劇」「散曲」という三つの文学ジャンルが「蘇卿と双漸の物語」にどのような変容をもたらしたかを追跡しようとしたものであり、「元曲」の文体上の制約と特徴が物語の伝承にいかなる影響を与えたかを考察したものと言える。また第二部の論旨でも明らかなように、本論文は元雑劇の最も重要な特徴をその旺盛なパロディー精神に見ようとするものである。「元雑劇」に見られる風刺性は従来からしばしば取り上げられてきたが、本論文はその風刺性に「パロディー精神」という用語をあてはめ、伝統的な概念である「滑稽」や現実主義的な物の見方、合理精神と結びつけて論じた。その着眼点のよさ、独創性は高く評価されてよい。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。